

ジョン・ゲイの『羊飼いの一週間』

海老澤 豊

一七一三年に『ガーディアン』誌上で牧歌をめぐる論争が起きた。ティッケルは五回にわたってアンブローズ・フィリップスの英国風牧歌を褒め、一方で古典牧歌に範を取ったポープの『牧歌集』を完全に無視した。これに怒ったポープは『ガーディアン』第四十号で、フィリップスの英国風牧歌を搦め手から攻撃した。自分の作品とフィリップスの作品を比較し、表面的にはフィリップスの牧歌が優れているような書き方をしながら、その実はフィリップスの欠点をあげつらったのである。

(1)

ポープはカリルに宛てた一七一四年六月八日付の書簡で、スウィフトらと連れ立ってホイッグ派の根城であったバトン・コーヒーハウスに行ったところ、アディソンやスティールと同席していたフィリップスに遭遇したと記している。同じ部屋にいたにもかかわらず、フィリップスはポープの面前で決して口を開こうとはしなかった。また当時ポープは英訳した『イリアッド』の予約購読者を募っていたが、ホイッグ派の文人で構成されるハノーヴァー・クラブの幹事を務めていたフィリップスは、仲間から預かった予約金を払おうとしなかったという。ポープは続けて「世間がゲイ氏の牧歌集を享受できたのもフィリップスのこの振る舞いのおかげである」といささか得意げに書いている。(2)

この挿話に関わる真偽はともかくとして、『ガーディアン』における牧歌論争がまだ冷め切らぬ一七一四年に、ポープの盟友ジョン・ゲイは『羊飼いの一週間』を発表した。この牧歌集は月曜日から土曜日までを題名にした六篇の牧歌で構成され、日曜日は安息日であるという理由から省略されているが、代わりに四歩格のカプレット形式で書かれた序詞が付されている。『羊飼いの一週間』がスペンサーの『羊飼いの暦』をもじったものであることは容易に推測できるが、ゲイは英国の羊飼いを主人公に選び、英国の動植物や風習を大いに取り入れ、古語やことわざに満ちた文体を用いて、「スペンサーの長子」たるフィリップスの英国風牧歌を意地悪く模倣し

たのである。ゲイは『ガーディアン』第四十号でポーブが示したのと同じ立場を取っているが、英国の田園風景や羊飼いたちの赤裸々な暮らしを描くことで、結果的にポーブのアルカディア的な牧歌を完全に否定することになったのは皮肉なことである。

『羊飼いの一週間』の序文には、『羊飼いの暦』に付されたEKによる序文や、フィリップスの『牧歌集』の序文、さらにはティッケルが『ガーディアン』に連載した牧歌論に対する当てこすりが満ちあふれている。(3) フィリップスの序文は「これほど詩神に耽溺している時代に、いかに牧歌が尊重されていないかということを考えると奇妙である」という一節で始まるが、ゲイはこれをもじって自作の序文を次のように書き出す。

さまざまな尊敬すべき才人たちにとって、大いなる驚きであることに（不当ではないのですが）、あらゆる希少な学問が実にたくさん溢れており、特にあらゆる種類の詩歌が高度に発達している、この我々のブリテン島に、この私の試み以前には、テオクリトスの真の古代の方法を模倣した、正しく簡素な牧歌に思い当たる詩人が（ラウンディレイに巧みな有名人は別にしても）いませんでした。

ゲイはこの牧歌集において、近頃大きな騒動を巻き起こしている「黄金時代」には目もくれず、「シシリアやアルカディア」ではなく、英国の「正直で労の多い農民」の作法を正しく描写すると宣言する。自分の目的は英国の生き生きとした風景を読者に提示することである。この牧歌に登場する女羊飼いは、怠惰に葦笛を吹かず、雄牛の乳を搾り、麦束を縛り上げ、豚が道に迷えば小屋に追い立てる。羊飼いは英国の野原で育つ草花しか集めず、「天人花の木蔭」で眠ることはなく、生垣で羊を「狼」から用心深く守るのである。

一読すると「黄金時代」や「アルカディア」や「天人花の木蔭」など古典的な牧歌の特性を否定しているように思われるが、ゲイがポーブと同じ方法によってフィリップスの英国化された牧歌を揶揄していることは明らかである。たとえばフィリップスは英国で絶滅した「狼」を第一牧歌に登場させているが、ポーブはフィリップスが「大いなる判断力を持って」英国の「狼」を描いていると『ガーディアン』第四十号で皮肉っている。同様にゲイも「巨匠のスペンサーが見事に述べているように」英国には狼はいないと、フィリップスが模範としたスペンサーを引き合いに出して、フィリップスを攻撃する。

続けてゲイはスペンサーに矛先を向ける。『羊飼いの暦』は音楽性に欠け、牧歌に不適切な宗教的な問題を扱っている。ただしスペンサーが羊飼いに付けた「田園にふさわしく簡素な」名前は好ましいと思われるので借用することにする。またスペンサーは牧歌集を『羊飼いの暦』と名づけ、これを十二ヶ月に分割しているが、自分もこれに倣って六篇の牧歌に月曜から土曜までの題名をつけ、全体は『羊飼いの一週間』とする。自分の描く羊飼いはキリスト教徒であるから、日曜日は教会でお祈りを捧げる安息日としよう。スペンサーの牧歌は「一月」や「三月」などと呼ばれるが、季節を特定するものは何ら描かれていないので、この点も模倣する価値がある。

最後にゲイが非難するのは、スペンサーに倣ってフィリップスが採用した方言や俗語である。この牧歌に登場する羊飼いの言葉遣いは、田舎娘も都会の貴婦人も話さないようなもので、過去に使われたことはないし、未来にも使われることはないであろう。それは田舎じみていると同時に都会風であり、古代風であると同時に現代的でもある。つまりフィリップスの羊飼いが話す言葉は、いかなる時代にも、どんな場所にも存在しないものだというわけである。批評家の中には『羊飼いの一週間』がブラックモアやダーフィの作風をもじっていると指摘する者もいるが、(4) 序文を見れば、ゲイの主たる攻撃的がフィリップスの英国風牧歌であることは明らかである。

(一) 月曜日は恋人を褒める

「月曜日、すなわち口喧嘩」(Monday; or, The Squabble)は、ロビン・クラウトとカディが自分の恋人を褒める歌合戦である。ロビン・クラウトの名はスペンサーの『羊飼いの暦』の主人公コリン・クラウトのもじりであり、カディも『羊飼いの暦』に何度も登場する羊飼いの名前である。ロビンの恋人「ブラウズリンダ」(Blouzelinda)は「赤ら顔で顔の太った娘っ子」(blouze)と、コリンの恋人「ロザリンド」(Rosalind)の語尾を合成した名で、カディの恋人「バクソーマ」(Buxoma)も「奔放な、淫らな」(buxom)から作り出されたものである。(5) また歌合戦の審判役クロッディポール(Cloddipole)は「魚の目が疼くのは篠つく雨の降る予兆」(That pricking corns foretold the gath'ring rain, l. 28)など天候の予知に長けた知患者であるが、語源は「まぬけ」(clod-poll)である。(6) 英語から派生し、人を食ったような命名は、スペンサーやフィリップスの英国風牧歌に対する当てこす

りに他ならない。

またゲイは伝統的な牧歌の常套表現を可能な限り滑稽なものに変形させている。たとえばロビンが「彼女の吐息は干し草よりもかぐわしい」(Her Breath was sweeter than the ripen'd Hay, l. 76)と歌えば、カディも「彼女の吐息は雌牛の吐息をはるかにしのぐ」(Her Breath by far excell'd the breathing Cows, l. 82)と歌い返すといった具合である。さらにゲイはフィリップスの語法についても揶揄する。

Thy Younglings, *Cuddy*, are but just awake,
 No Thrustles shrill the Bramble-Bush forsake,
 No chirping Lark the Welkin sheen invokes,
 No Damsel yet the swelling Udder strokes;
 O'er yonder Hill does scant the Dawn appear,
 Then why does *Cuddy* leave his Cott, so rear? (ll. 1-6)

汝の小羊は、カディ、目覚めたばかりで、
 ツグミの甲高い声もキイチゴの茂みを離れず、
 囀るヒバリはきらびやかな大空に訴えず、
 乙女も張った牛の乳房をまだしごかない。
 向こうの丘の上に朝日がほとんど見えないのに、
 なぜカディは小屋を出るのか、こんな早朝に。

ポーブは『ガーディアン』でフィリップスが古語を多用していると批判したが、この引用にある「子羊」(Younglings)、「大空」(Welkin)、「乙女」(Damsel)などはフィリップスがスペンサーから借用し、『牧歌集』で好んで用いた語に他ならない。追い打ちをかけるように、ゲイはこれらの語に念の入った注釈を施している。たとえば「大空」(Welkin)については、「Welken と同義で、古サクソン語で雲を意味するが、詩的許容によって元素すなわち空としばしば見なされる。チャーサーの『夢』(公爵夫人の書)における『大空には雲ひとつなかった』(Ne in all Welkin was no Cloud)という詩行に見られるように」と説明される。ここでゲイがチャーサーに言及するのは、スペンサーが『羊飼いの暦』でチャーサーを羊飼いの神「ティテュラス」と呼んでいるためであろう。またゲイの注釈そのものが『羊飼いの暦』に付き

れた「注解」のパロディになっている。他の語についても「ほとんどない」(scant)については「古代英国の作家たちが scarce の代わりに用いた」とか、「早朝」(Rear)は「英国のいくつかの地方で使われる表現で、朝の早い時分を表わす」といった具合である。この二つの語はフィリップスの『牧歌集』には出てこないが、英国の古語や方言を導入したフィリップスの詩法を、ゲイはことさらに強調してみせるのだ。

『羊飼いの一週間』にはこのような意地の悪い注釈に加えて、巻末には「人名、植物、花、果実、鳥、獣、虫、その他この牧歌集で言及される事物のアルファベット順目録」と題された索引がついている。例を挙げれば、Youngling (子羊), Robin-red-breast (赤胸こまどり), Gilly-flower (アラセイトウ), Milk-pail (牛乳桶), Blind-man's Buff (目隠し鬼), Will-a-Whisp (鬼火), Gillian of Croydon (クロイドンのジリアン：バラッドの題名)など、英国の田園や羊飼いになじみの深い事物ばかりである。語彙の選択はかなり恣意的で、抜け落ちているものが多数あるばかりか、厳密にはアルファベット順になっていない。同様の索引はゲイの擬似農耕詩『トリヴィア』にも付されているが、フィリップスを初めとする他の詩人たちの『牧歌集』でお目にかかったことはない。ゲイが索引をつけた目的は、フィリップスの牧歌が土着的なまでに英国風であり、古典的な牧歌に比べていかに卑近であるかを示すことにあるのだろう。

もっとも「月曜日」で恋人を自慢しあうロビンとカディの歌合戦は、存外テオクリトスやウェルギリウスの牧歌に見られる古典的な慣習に則っている。朝の田園で二人の羊飼いが出くわし、ロビンの挑発にカディが乗り、クロッディポールに判定役を委ねて歌合戦となる。カディが賞品としてオークの杖を賭ければ、ロビンもダマジカの革で作った煙草入れを差し出す。このあたりはウェルギリウスの第三牧歌とほぼ同じ構造を備えている。またウェルギリウスの第七牧歌には植物と比較して恋人を讃える箇所があるが、ゲイはこれを模倣してロビンにこう歌わせる。

My *Blouzelinda* is the blithest Lass,
 Than Primrose sweeter, or the Clover-Grass.
 Fair is the King-Cup that in Meadow blows,
 Fair is the Daisie that beside her grows,
 Fair is the Gillyflow'r, of Gardens sweet,
 Fair is the Mary-Gold, for Pottage meet.

But *Blouzelind's* than Gillyflow'r more fair,
Than Daisie, Mary-Gold, or King-Cup rare. (ll. 41-8)

私のブラウズリンダは快活な娘で、
プリムローズやクローヴァーより芳しい。
草叢に咲き誇るキンポウゲは美しく、
彼女の傍らで育つヒナゲシは美しく、
庭の芳香たるアラセイトウは美しく、
羹に相応しいマリゴールドは美しい。
だがブラウズリンダはアラセイトウより美しく、
ヒナゲシや、マリゴールドや、キンポウゲより稀だ。

ここに列挙されている花々は英国の野辺に咲くものばかりで、ゲイが序文で「羊飼いは英国の野原で育つ草花しか」集めないと述べたことを実践している証となるが、実は『ガーディアン』第三十号でティッケルが称賛したフィリップスの第四牧歌の一節「見よ、ここには黄金色のキンポウゲが、白いヒナゲシや青いエンダイブと混じり合う」(Lo here the King-Cup, of a golden Hue, / Medly'd with Daisies white, and Endive blue, ll. 7-8)を下敷きにしている。ロビンに対抗してバクソーマを讃えるカディの歌にも「幼い小羊やガチョウの羽毛のように清潔で、ゴシキヒワのように日曜の晴れ着を着る」(Clean as young lambkins or the goose's down, / And like the goldfinch in her Sunday gown, ll. 51-2)という件がある。これもフィリップスの第四牧歌における「聞け、いかに派手なゴシキヒワやツグミが、調べ良き囀りであるキイチゴの茂みを満たすか」(Hark how the gaudy Goldfinch, and the Thrush / With tuneful Warblings fill that Bramble -Bush, ll. 9-10)を踏まえた詩行であり、「ツグミ」と「キイチゴの茂み」はすでに引用した「月曜日」の二行目に移植されている。

ただしブラウズリンダやバクソーマを田園のありふれた動植物に喩える詩行には、フィリップスの英国風牧歌に対する諷刺はさほど感じられず、むしろ彼女たちの野卑さを滑稽に描こうとする意識のほうが優っている。やはりウェルギリウスの第七牧歌(ゲイは自注でその一節を引用している)をもじって、彼女たちの好物を描く一節にも同じ傾向が認められる。先ほどは田園の花々を列挙して、最後に私の恋人は花々よりも美しいという論法であったが、今度はさまざまな食物を並べておいて、

最後に恋人の好物は実に慎ましく、しかも自分にはどれも好みでないという逆の論法になっている。まずロビンが歌う。

Leek to the *Welch*, to *Dutchmen* butter's dear,
Of *Irish Swains Potatoe* is the Chear;
Oats for their Feasts, the *Scottish* Shepherds grind,
Sweet *Turnips* are the Food of *Blouzelind*.
While she loves *Turnips*, *Butter* I'll despise,
Nor *Leeks* nor *Oatmeal* nor *Potatoe* prize. (ll. 83-8)

ウェールズ人にはニラ、オランダ人には高いバター、
アイルランドの農民にはジャガイモが御馳走だ。
オート麦を宴席でスコットランドの羊飼いは詰め込み、
甘いカブラがブラウズリンダの食物だ。
彼女はカブラを愛するが、バターを私は軽蔑し、
ニラもオートミールもポテトも尊ばない。

続いてカディも歌う。

In good *Roast Beef* my Landlord sticks his Knife,
The *Capon* fat delights his dainty Wife,
Pudding our Parson eats, the Squire loves *Hare*,
But *White-pot* thick is my Buxoma's Fare.
While she loves *White-pot*, *Capon* ne'er shall be,
Nor *Hare*, nor *Beef*, nor *Pudding*, Food for me. (ll. 89-94)

美味なローストビーフに領主がナイフを刺し、
太った去勢鶏を気難しい奥方は喜び、
肉の詰め物を牧師は食べ、郷土は兎に目が無い。
だが濃いホワイト・ポットが私のバクソーマの食物だ。
彼女はホワイト・ポットを愛するが、去勢鶏も、
兎も、牛肉も、肉の詰め物も私の食物ではない。

ロビンがイングランド人としての自尊心を表明すれば、カディは質素な食物を旨とする羊飼いの誇りを歌うが、いささか負け惜しみに聞こえないこともない。「ホワイト・ポット」はパンや米や小麦粉を入れたプディングのことで、ゲイの故郷デヴォンシャーの名物であるという。(7)

ロビンとカディの掛け合いは次第に卑俗さを増し、「目隠し鬼」(Blindman's-buff, l. 95)や目を閉じたまま背中を叩いた者を当てる「ポコペン」(Hot-cockles, l. 99)といった田園の遊戯で恋人といちゃついたことが歌われる。(8) またフィリップスの第六牧歌で羊飼いが水浴する恋人を覗き見る場面について、ポープは『ガーディアン』第四十号で「無垢」の証左であると逆説的な表現で揶揄した。ゲイはこれを踏まえた上で、性的な含意を強調した詩行を書いた。まずロビンが歌い、続いてカディが応える。

On two near Elms, the slacken'd Cord I hung,
Now high, now low my *Blouzelinda* swung.
With the rude Wind her rump'd Garment rose,
And show'd her taper Leg, and scarlet Hose. (ll. 103-6)

二本の近い榆の木に、緩んだ綱を私が掛ければ、
高く、低く、ブラウズリンダはブランコをする。
強い風が吹いて彼女のしわくちゃの衣がめくれ、
彼女の先細りの足と、真赤な長靴下が見えた。

Across the fallen Oak the Plank I laid,
And my self pois'd against the tott'ring Maid,
High leapt the Plank; adown *Buxoma* fell;
I spy'd—but faithful Sweethearts never tell. (ll. 107-10)

樾の倒木に交差するように板を渡して、
よろめく乙女に対して私の体で釣り合いを取った。
高々と板が跳ねて、バクソーマは後にのけぞった。
見えたが、忠実な恋人は決して口にせぬ。

この引用はブランコやシーソーといった田園の遊具をだしにして、英国の羊飼いの開放的な恋の戯れを描いたもので、ゲイがフィリップスよりも卑俗さの度合いを高めていることは明白であろう。

さらに二人の羊飼いは互いに謎掛けで勝負をつけようとする。ロビンの謎は「一番豊かな金属と結びついた処女の名前がついた花は一体何だ」(*What Flower is that which bears the Virgin's Name, / The richest Metal joined with the same*, ll. 113-4)で、答えは「マリーゴールド」(Marygold)となり、カディの謎は「処女と結びつき、墓に撒き散らされる、王室の勲章が切望する花は一体何だ」(*What Flow'r is that which Royal Honour craves, / Adjoin the Virgin, and 'tis strown on Graves*, ll. 117-8)で、答えは「ローズマリー」(Rosemary)となる。ここにいたって審判役のクロッディポールは、労働する時間になったと二人を論して歌合戦を終了させ、「牛どもは汝らの歌に嫌気がさし、私も同様だ」(They're weary of your Songs—and so am I, l. 124)と役割を放棄する。

(二) 火曜日は失恋を嘆く

「火曜日、すなわち小唄」(Tuesday; or, The Ditty)は、牧師の娘メアリアンが独白する恋の嘆き節である。メアリアンは歌や葦笛、踊りや相撲に巧みなコリン・クラウトに惹かれるが、彼は西方のシシリーという娘に心を移してしまった。見捨てられたメアリアンは乳絞りやバター作りなどの「田園の仕事」(Country Cares, l. 15)に身が入らず、木蔭に横たわって溜息をつき、嘆きながら悲しみの歌を歌うのであった。ちなみにシシリー(Cic'ly)という名は、『ガーディアン』第四十号でポーブがフィリップスの牧歌の田舎ぶりをからかうために作り上げたバラッドの主人公の名と同じである。また「ああ悲しい。ああ悲しい昼と夜」(Ah woful Day! ah woful Noon and Morn, l. 25)などの大げさな間投詞を含む句も、フィリップスに対するあてこすりになっている。

メアリアンはかつてコリンのために尽くしたさまざまな世話を回想する。リンネルの肌着を洗い、タイツを繕い、繕い糸で手袋を編み、食事を用意するなど、至れり尽くせりの甲斐甲斐しさである。またコリンは羊飼いの仕事をこなすだけではなく、農民としてもなかなかの働き者で、メアリアンの献身も一年を通じて畑や納屋などあらゆる場所で行われた。

If in the Soil you guide the crooked Share,
Your early Breakfast is my constant Care.
And when with even Hand you strow the Grain,
I fright the thievish Rooks from off the Plain.
In misling Days when I my Thresher heard,
With nappy Beer I to the Barn repair'd;
Lost in the Musick of the whirling Flail,
To gaze on thee I left the smoaking Pail;
In Harvest when the Sun was mounted high,
My leathern Bottle did thy Drought supply;
When-e'er you mow'd I follow'd with the Rake,
And have full oft been Sun-burnt for thy Sake; (ll. 51-62)

畑でお前が曲がった鋤先を導くならば、
早めの朝食は私がいつも世話をする。
この手で、お前が穀物を撒き散らす時には、
私は盗人のカラスを脅して畑から追い払った。
小糠雨が降る時はお前の脱穀に耳を澄ませ、
泡立ったビールを持って私は納屋に赴いた。
旋回する穀竿の音楽に気を奪われて、
お前を見つめて湯気立てる手桶を忘れた。
収穫の時には太陽が高く昇っている時に、
私の革袋がお前の渴きを満たしたものだ。
どこでお前が草を刈ろうと、私は熊手を持って
付いていき、お前のためにすっかり日に焼けた。

英国の「正直で労の多い農民」の作法を正しく描写すると序文で宣言したように、これまで見てきた種々の牧歌とは比較にならないほど、ゲイが田園の労働を詳細に描いていることが了解されるだろう。ここにはダックやメアリ・コリアなど農民詩人と呼ばれる者たちが作品で漏らした、労働の過酷さや農民生活の貧しさなどについては触れられていない。あくまでもゲイが書いているのは牧歌であり、田園生活

の悲惨な面は隠すことが前提になっているからである。ただし繰り返すように、ここまで田園の労働について具体的に言及した牧歌はなかった。これはフィリップスの牧歌に対する攻撃と考えると、説明がつかないことなのである。『田園の狩り』や『トリヴィア』を読めば、対象が田園であれ都会であれ、ゲイが鋭い観察眼の持ち主であることが分かるが、『羊飼いの一週間』でもその特性は十全に発揮されているのである。

しかしコリンに対するメアリアンの無私な奉仕も結局報われることはなかった。その理由は「もっと私を愛して、糞（あつもの）を愛するのはそれぐらいで」(Ah, love me more, or love thy Pottage less, l. 72)という嘆きに如実に表われている。また彼女は金曜日の夕暮れに三人のジプシーに手相を見てもらい、「一部は私の世俗の利益で、大部分は恋に関する」(Some in my worldly Gain, but most in Love, l. 78) 試練を経なければならぬと告げられる。結果として彼女は「三匹の雌鳥と老いた雄鶏」(three Hens and our old Cock, l. 79)と「二枚のピンナー（被り物）と肌着」(two Pinner and a Smock, l. 80)を盗まれたことに気づく。にもかかわらず彼女は盗人であるジプシーたちに「忠実な娘に羊飼いを返してちょうだい」(And to a constant Lass give back her Swain, l. 86)と願わずにはいられないのである。

最後は以下のような詩行である。

Thus *Marian* wail'd, her Eyes with Tears brimfull,
When *Goody Dobbins* brought her Cow to Bull.
With Apron blue to dry her Tears she sought,
Then saw the Cow well serv'd, and took a Groat. (ll. 103-6)

かくメアリアンは嘆き、彼女の目に涙が溢れた、
ドビンズ婆さんが雌牛を雄牛に娶わせた時に。
青い前掛けで彼女は涙を拭おうとして、
雌牛が十分に奉仕されるのを見て端金を得た。

失恋の涙に暮れていたマリアンは、牛の交合を目の当たりにして、種付けの代金をもらう。マリアンは今は失われたコリンとの交情を回想しているのか、それともコリンの子を身ごもって金で解決されたのか、深読みをすればきりが無い。古典的

な牧歌における恋の嘆きは、恋人への執着心を振り払って出直すか、あるいは自死を選ぶかのいずれかの結末を迎える。マリアンの場合は明らかに前者であり、生活力に長けた女の強さを感じずにはいられない。

(三) 水曜日は自殺を思いとどまる

「水曜日、すなわち気鬱」(Wednesday; or, The Dumps)も恋の嘆きを主題にしている。ゲイは副題の「気鬱」について、憂鬱症で亡くなったエジプト王デュモプス(Dumops)の名前に由来すると述べた後に、英国各地で食される胸焼けのするプディング「ダンプリン」(Dumplin)に由来すると説く者もあると、例のごとく軽妙な調子の注釈を付している。主たる典拠はダモンが失恋のために死を選ぶウェルギリウスの第八牧歌で、ゲイはおびただしい原詩を注釈という形で示している。また猥雑なバラッド詩人トマス・ダーフィに対する言及もあり、語彙や表現はスペンサーを思わせるものが少なくない。過去のさまざまな文学作品を滑稽にずらしながら、自分の詩を作り上げていくというゲイの得意な芸当が発揮されている。

語り手となるのは「スパラベッラと呼ばれる美しい娘」(A Maiden fair, that *Sparabella* hight, l. 2)である。彼女が恋するバンキネットは、棒術試合で勝ち得たりポンをクラムシリスという別の娘に与えてしまい、見捨てられたスパラベッラは恋の嘆きを歌う。このあたりは『妖精の女王』で馬上槍試合の勝者が貴婦人から身につけていた装飾品を与えられるという慣習のパロディであろう。「呼ばれる」(hight)という語もスペンサーに頻出することは言うまでもない。

スパラベッラは「誠を尽くす娘が処女で死ぬとは辛いこと」(*'Tis hard so true a Damsel dies a Maid*)というリフレインを繰り返しながら、恋敵クラムシリスに対して悪罵を投げかける。

Her blubber'd Lip by smutty Pipes is worn,
 And in her Breath Tobacco Whiffs are born;
 The cleanly Cheese-press she could never turn,
 Her awkward Fist did ne'er employ the Churn; (ll. 39-42)

彼女の脂肪太りの唇は煤けたパイプで磨り減り、
 彼女の吐息には煙草の匂いが生まれる。

清潔なチーズプレスを彼女は廻したことがなく、
彼女の不器用な拳は攪拌器を使ったこともない。

クラムシリス (*Clumsilis*) という名が「不器用や不体裁」を表わす *clumsy* から来ていることを示した表現になっているが、スパラベッラは「火曜日」のマリアンと同様に、自分が働き者であることを虚しく主張するばかりである。『羊飼いの一週間』では家事に長けた娘が男の心を勝ち取るわけではない。スパラベッラは自らの容貌について、クラムシリスと比較しながら次のように歌う。

I've often seen my Visage in yon Lake,
Nor are my Features of the homeliest Make.
Though *Clumsilis* may boast a whiter Dye,
Yet the black Sloe turns in my rolling Eye;
And fairest Blossoms drop with ev'ry Blast,
But the brown Beauty will like Hollies last.
Her wan Complexion's like the wither'd Leek,
While *Katherine* Pears adorn my ruddy Cheek.
Yet she, alas! the witless Lout hath won,
And by her Gain, poor *Sparabell's* undone! (ll. 49-58)

向こうの湖で自分の顔を何度も見た、
容貌はこの上なく粗末というわけではない。
クラムシリスは肌が白いのを自慢するが、
私の丸い眼の中では黒いリンボクが回る。
風が吹くたびに美しい花は散るけれども、
褐色の美はヒイラギのようにずっと残る。
彼女の蒼白の顔色は萎びたリークのような。
キャサリン梨が私の赤らむ頬を飾っている。
でも彼女は無知な田舎者を勝ち取って、
彼女が勝つと、哀れなスパラベッラの負け。

スパラベッラ (*Sparabella*) という名は「靴底に打つ小さな、頭のない楔形の鉄の

鋌釘」を意味する *sparable* が語源になっている。「重苦しいクラムシリシ」(*heavy Clumsilis*, l. 37)は不器用かもしれないが、ふっくらとした器量良しなのであろう。「無知な田舎者」のバンキネットは家事よりも外見を重視して相手を選んだというわけである。

だがスパラベッラの苦難はこれだけでは終わらず、彼女は森で狩りをしていた郷士に襲われて無理やり唇を奪われる。郷士は絹の財布から金貨を取り出して彼女に与えたばかりか、「レースの横縞の入った仕着せを着たディック」(*Dick in liv' ry strip' d with lace*, l. 83)が彼女を恥辱から守るため結婚する、つまり自分の罪を隠すために従僕と娶わせると断言する。いまだバンキネットを想うスパラベッラは、レースや金よりもお前が愛しいと嘆きながらも、愛の神の無慈悲さを呪わずにはいられない。これはテオクリトスの第三歌やウェルギリウスの第八牧歌などで繰り返し歌われてきた主題であり、いずれも語り手の自死を思わせる終わり方になっている。

スパラベッラも恋の苦しみにから逃れるために自殺を企てようとする。「さらば、汝ら森よ、草地よ、流れる川よ」(*Farewel, ye Woods, ye Meads, ye Streams that flow*, l. 99)と古典的な牧歌の常套句を口ずさみながら、ナイフで喉を切り裂くか、木で首を吊ろうか、池に飛び込もうか、彼女の思いは千々に乱れる。ようやく湖水に身を投げることに決めた彼女ではあったが、とどのつまりは「思慮深い乙女はもう遅すぎるからと思ひ、明日が来るまで死ぬのを遅らせよう」(*The prudent Maiden deems it now too late, / And 'till to Morrow comes defers her fate*, ll. 119-20)と思ひ止まる。見事な肩すかしであり、古典牧歌の慣習を根底から否定していると言えよう。

(四) 木曜日はまじないをかける

「木曜日、すなわち呪文」(*Thursday; or, The Spell*)は、田園の娘ホブネリアがまじないによって、町の女に心移したラバキン(*Lubberkin* は「なりの大きな愚図な奴」を意味する *lubber* の派生語)の愛を取り戻そうとする独白である。これがまじないを扱ったテオクリトスの第二歌「シマイタ」や、ウェルギリウスの第八牧歌におけるアルペシボエウスの歌を手本としていることは、ゲイの自注からも明らかだ。また「水曜日」の主人公の名前スパラベッラは「靴底に打つ小さな、頭のない楔形の鉄の釘」が語源になっていたが、ホブネリア(*Hobnelia*)という名も「靴

底に打つ頭の大きな、短い突起のある鋌釘」を意味する *hobnail* から来ている。スパラベツラが最後には思い止まるものの、失恋のために自殺を考える一方で、ホブネリアは恋人の愛情を再び獲得しようとまじないに精を出す。だが「水曜日」がウェルギリウスの第八牧歌の前半を、「木曜日」が後半を模倣しているように、この二編は『羊飼いの一週間』の中でもとりわけ密接な関係にあると考えられる。

牛飼いのラバキンは町へ牛を売りに行く途中で「きれいな身なりの乙女」(A maiden fine bedight, l. 8)に心を奪われ、野原とホブネリアを見捨てたのであった。ホブネリアは「鋭いかかとで私は三度地面に印をつけて、それから、ぐるぐるぐると三度体を廻す」(*With my sharp Heel I three times mark the Ground, / And turn me thrice around, around, around*)というリフレインを繰り返しながら、田園に古くから伝わる種々のまじないを試みる。ただし彼女のまじないは、シマイタやアルペシボエウスのように、恋人の心を取り戻す呪術というよりも、自分とラバキンが運命の赤い糸で結ばれていることを確認する恋占いである。かつてホブネリアは糸車を回している時に、ラバキンが急に部屋に入ってきたことに驚いて、紡いでいた糸を切ってしまった。それは彼が彼女との約束を破ることになる確かな予兆であったが、彼女はすかさず糸を結び合わせたのであった。

またホブネリアの占いは田園のありふれた産物を利用した他愛のないものばかりである。たとえばカタツムリを灰の上で這わせると見事なエル¹の文字を描き、つなげて剥いたリンゴの皮を放り投げれば、やはり草の上にエルの字になって広がる。

「エルの字はラバキンとラヴに含まれる」(For L is found in Lubberkin and Love, l. 58)と彼女は自分を納得させて喜ぶ。また彼女がハシバミの実二つに恋人の名を書いて炉に投じると、片方の実は大きくはぜてしまうが、ラバキンの名を記した実は明るく輝く。またリンゴの種を二つそれぞれの頬にくっつけると、片方はすぐに落ちてしまうが、ラバキンに割り当てた種は最後まで落ちない。このような素朴な恋占いでホブネリアは気持ちを奮い立たせ、野原で放ったテントウムシが西の方角へ飛んでいくのを見て、不実なラバキンを町から呼び戻せと祈るのである。

さらにホブネリアは町に立つ市で産みたての卵を売り、有り金をすべてはたいて「愛の妙薬」(Love-Power, l. 124)を手に入れる。次の日曜日に教会のミサが終わった後、彼女はエールハウスでラバキンのマグに「カンタリス」(*Golden Flies*, l. 127)を溶かし込もうというのである。まじないを扱った古典的な牧歌では、愛の妙薬を作ることがひとつの挿話として定着しており、テオクリトスのシマイタ、ウェルギリウスのアルペシボエウス、サンナザロのヘルピュリスは、いずれも特殊な材

料を調合して恋人に飲ませる惚れ薬を作り上げる。だがホブネリアは薬局で出来合いの薬草を買い求めるだけで、シマイタやヘルピュリスのような魔女としての属性は薄くなっている。

彼らのまじないの結果はどうなったか。シマイタはデルピスの心が取り戻せないことを悟って、男を毒殺することをほのめかして歌を終える。同様にヘルピュリスも帰らぬマエオンに飲ませようと毒薬を調剤する。一方でアルペシボエウスは飼犬のヒュクラスが吠える声を聞き、愛するダブニス町から帰ってくる姿を戸口で見る。ゲイが「木曜日」の結末に選んだ手本はアルペシボエウスの歌である。

But hold—our *Light-Foot* barks, and cocks his Ears,
O'er yonder Stile see *Lubberkin* appears.
He comes, he comes, *Hobnelia's* not bewray'd,
Nor shall she crown'd with Willow die a Maid.
He vows, he swears, he'll give me a green Gown,
Oh dear! I fall *adown, adown, adown!* (ll. 131-6)

でも待つて、ライトフットが吠え、耳を立てる、
向こうの踏越し段にラバキンの姿が見える。
彼が来る、彼が来る、ホブネリアを裏切らずに、
処女のまま死んでヤナギで飾られることもない。
彼は誓う、彼は誓う、私の上着を緑に染める、
あらまあ、私は倒れる、落ちる、墮ちる。

まじないが功を奏したと信じるホブネリアは、帰ってきたばかりの男にすんなりと体を許してしまうのである。ラバキンが彼女に誓ったのは結婚であろうが、どこまで信用できるのか分かったものではない。『羊飼いの一週間』は実におおらかな世界なのである。

(五) 金曜日は恋人の死を悼む

「金曜日、すなわち弔歌」(Friday: or, the Dirge)はバンキネットとグラビノルの二人が、「月曜日」でロビンの恋人であったブラウズリンダの死を悼むパストラ

ル・エレジーである。原典になっているウェルギリウスの第五牧歌では、モプスがダプニスの死を嘆き悲しむ一方で、メナルカスはダプニスが天上に昇ったことを寿ぐ。これを忠実に模倣したフィリップスの第三牧歌でも、アンジェロがアルビノの死を悼むのに対して、パリンはアルビノが天上で祝福されていると歌う。またポープの「冬」でもサーシスは昇天したダフネが天凋花のあずまやで安らぐとリシダスに語る。この三篇に比べると、ゲイの「金曜日」は著しく世俗的・地上的である。スパックスがブラウズリンダは「理想化された存在としてではなく、正直によく働く少女として」追悼されると指摘するように、(9) 二人の羊飼いはブラウズリンダをあくまでも田園の労働に勤しむ娘として回顧する。まずバンキネットが二人で労働をした時の思い出を歌う。

Where-e'er I gad, I *Blouzelind* shall view,
Woods, Dairy, Barn and Mows our Passion knew.
When I direct my Eyes to yonder Wood,
Fresh rising Sorrow curdles in my Blood. (ll. 41-4)

どこに行ってもブラウズリンダを見かけた、
森、酪農場、納屋、干草小屋は我らの愛を知る。
向こうの森へと眼を向ければ、新たに
生まれる悲しみが私の血を凝固させる。

ブラウズリンダが森で集めた薪をバンキネットは背負い、彼が杖でドングリを叩き落とせば、彼女はそれを前掛けに詰め込んだ。酪農場で彼女が伸ばしたバターに百合の印をかたどり、大飯食らいの豚に乳清を与える間、バンキネットは彼女の横顔に見惚れたものだ。納屋でバンキネットが穀竿で小麦を叩けば、ブラウズリンダの篩からは籾殻が飛んできた。干草小屋でバンキネットが干草の束を放れば、彼女がそれをきれいに並べて山を作った。牧歌でこれほど田園の労働を詳細に描いた例は他になく、古典牧歌やフィリップスの牧歌にもまず見られない。多くの牧歌論で羊飼いと結びつけられる閑暇も、ここにはまるで存在しないかのようである。

ただ同時にゲイはウェルギリウスを模倣することも忘れてはいない。ウェルギリウスの第五牧歌でモプスはダプニスの死が自然に与える悪影響を歌う。ドライデンの英訳で引く。

No fruitful Crop the sickly Fields return;
But Oats and Darnel choke the rising Corn.
And where the Vales with Violets once were crown'd,
Now knotty Burrs and Thorns disgrace the Ground. (ll. 55-8)

実り多き作物は病んだ畑に戻らず、
オート麦や毒麦が成長する麦を窒息させる。
谷間はかつてスマイレで飾られていたが、
今や節のあるイガやイバラが大地を辱める。

フィリップスの第三牧歌でもアンジェロットはアルビノの死後の不作を嘆く。悪しきものが良きものにとって代わるという表現は無視され、全般的に不毛性が強調されている。

In labour'd Furrows sow the Choice of Wheat,
And over empty Sheaves in Harvest sweat:
A thin Increase our woolly Substance yield,
And Thorns and Thistles overspread the Field. (ll. 63-6)

苦勞して畝に選りすぐりの大麦を蒔くが、
汗水たらして収穫しても空の束ばかり。
我らの羊毛もほとんど増えることはなく、
ただイバラとアザミが野を覆い尽くした。

そしてゲイの「金曜日」でバンキネットは、ブラウズリンダの死によって草地を彩る花々が変わり果てたと訴える。

Henceforth let not the smelling Primrose grow;
Let Weeds instead of Butter-flow'rs appear,
And Meads, instead of Daisies, Hemlock bear;
For Cowslips sweet let Dandelions spread, (ll. 84-7)

今後、馥郁たるプリムローズを咲かせるな、
キンボウゲの代わりに雑草を繁茂させよ、
草地はヒナゲシの代わりにドクニンジンを生み、
美しいカウスリップの代わりにタンポポを広げよ。

ウェルギリウスやフィリップスは食物となる麦の不作に触れていたが、ゲイはもっぱら目に麗しい草地の花々を歌い上げる。ここで列挙される花々がフィリップスの英国風牧歌から取られたものであることは言うまでもない。

バンキネットがブラウズリンダの生前の姿を歌うのに対して、グラビノルは彼女の遺言や葬送について語る。病床に臥せったブラウズリンダは、家禽や家畜の世話を妹のスーザンに任せよう母親に告げ、わずかばかりの形見を分けるように指示する。へそくりの二十シリングは牧師と母親で半分ずつ分け、紡ぎ車と熊手はスーザンに、麦藁帽子はペギーに、またグラビノルには革袋と銀の指輪を、バンキネットには銀貨三枚と愛の印として曲がった九ペンスを遺せと。通例パストラル・エレジーでこのような現実的で瑣末な事柄が歌われることはない。

同様に彼女の葬儀についても事細かに描かれる。憂鬱な面持ちの牧師を先頭に近隣の者たちは墓地に向かい、参列者は彼女の棺の上にさまざまな季節に咲く花々を投げ入れる。牧師は次は誰の順番か分からぬが、彼女の砂時計は尽き、神は必ずや彼女の魂を受け入れるであろうと、お決まりの説教を垂れる。彼女の墳墓は柳の枝を編んだ垣根で囲まれる。牧師の飼っている馬と牛が教会墓地の草を食むからである。葬儀の後で一行はブラウズリンダの家で生姜入りの葡萄酒を振舞われる。過度の悲しみは過度の乾きをもたらす」(*Excessive Sorrow is exceeding dry*, l. 152)からである。時に軽妙な表現に向かうことはあっても、ゲイの筆致は概して牧歌には似合わないほど写実的である。ゲイの描く登場人物が、アルカディアに住む理想化された羊飼いではなく、英国の田園に住む等身大の村人、いささか野卑だが生命力にあふれた者たちであることは誰も否定できまい。

続く段落はふたたびウェルギリウスの第五牧歌を踏まえている。メナルカスはダプニスの墳墓に毎年供物を捧げようと誓う。ドライデンの英訳で引く。

While savage Boars delight in shady Woods,
And finny Fish inhabit in the Floods;

While Bees on Thime, and Locusts feed on Dew,
Thy grateful Swains these Honours shall renew. (ll. 119-22)

野生の猪たちが木蔭なす森で大いに喜び、
鱈ある魚たちが川の中に住む間は、
蜜蜂がタイムを、バッタが露を糧とする間は、
汝に感謝する羊飼いはこの栄誉を新たにす。

フィリップスもこの箇所を模倣して第三牧歌の結末にあてているが、ゲイの描写はここでも写実的で、実際に英国の田園で見られるような風景に変えられている。

While Bulls bear Horns upon their curled Brow,
Or Lasses with soft Stroakings milk the Cow;
While padling Ducks the standing Lake desire,
Or batt'ning Hogs roll in the sinking Mire;
While Moles the crumbled Earth in Hillocks raise,
So long shall Swains tell *Blouzelinda's* Praise. (ll. 153-8)

牡牛が巻き毛を生やした額に角を備え、
娘たちが牝牛から優しく乳を搾る間は、
よちよち歩くアヒルが澱んだ水を望み、
大食漢の豚が沈む湿地で転げ回る間は、
モグラが砕けた土を小高い丘に積み上げる間、
羊飼いらはブラウズリンダの称賛を語る。

しかしながら、こう誓った舌の根も乾かないうちに、バンキネットとグラビノルはブラウズリンダのことなどさっさと忘れてしまう。

Thus wail'd the Louts, in melancholy Strain,
'Till bonny *Susan* sped a-cross the Plain;
They seiz'd the Lass in Apron clean array'd,
And to the Ale-house forc'd the willing Maid;

In Ale and Kisses they forget their Cares,
And *Susan Blouzelinda's* Loss repairs. (ll. 159-64)

かく陰鬱な調べで田舎者たちは嘆いたが、
陽気なスーザンは野を横切って急ぐ。
二人はきれいな前掛けで装った娘を捕まえ、
酒場に了解した娘を無理やり連れて行く。
エールと接吻で彼らは憂さを晴らし、
スーザンはブラウズリンダの死を埋め合わせる。

スーザンがブラウズリンダの妹であることはすでに述べたが、この結末もパストラルエレジーの枠組みを大きく逸脱している。ゲイの描く羊飼いたちはきわめて現実的であるばかりか、己の欲望にあまりに忠実なのである。

(六) 土曜日は飲んだくれて放言する

『羊飼いの一週間』の掉尾を飾る「土曜日、すなわち飛翔」(Saturday, or The Flights)は、酔っ払った羊飼いボウジベウスが「詩的な飛翔」(poetic flight)ならぬ戯言を喚き散らすという趣向になっている。典拠になっているウェルギリウスの第六牧歌では、バックスの従者で半神半人のシレヌスが、酔っ払って寝込んでいるところを二人の若者に捕らえられ、乞われるままに天地創造の秘密やさまざまな神話について語る。ゲイはこの枠組みを借りながらも、誠に卑俗なボウジベウスの放言を書き連ねている。

収穫の季節に生垣のそばでこっそり屈み込んだスーザンが悲鳴を上げ、仲間たちは彼女が蛇に襲われたのだと思って駆け寄ると、そこには深酒で寝こけているボウジベウスの姿があった。シシリーが音を立ててボウジベウスに接吻し、ドルカスが彼の鼻孔を薫しべでくすぐると、酔漢はようやく目を覚まして調べ良き歌を歌い始める。シレヌスが諸元素の結合によって天地が創造されるさまを歌ったのに倣って、ボウジベウスの歌も自然の法則から始まる。ただしその内容は、いかめしい梟はなぜ太陽を直視しないか、いかにキャベツは上を向いて育つか、いかに鬼火は夜歩きをする田舎者を欺くか、子犬は九度太陽が巡るまでは目が見えないなど、田園で暮らす者たちの経験や観察に基づく動植物の習性或迷信に終始している。

次にボウジベウスが歌うのは人々で賑わう市の風景で、繁華な場面の描写はゲイがもっとも得意とするところである。

How Pedlars Stalls with glitt'ring Toys are laid,
The various Fairings of the Country Maid.
Long silken Laces hang upon the Twine,
And Rows of Pins and amber Bracelets shine;
How the tight Lass, Knives, Combs, and Scissars spys,
And looks on Thimbles with desiring Eyes. (ll. 73-8)

いかに行商人の屋台にきらめく装身具が積まれ、
田舎娘のさまざまなお土産になることか。
長い絹のレースが巻きついて吊るされ、
列になったピンや琥珀の腕輪が輝いている。
いかに締め屋の娘が、ナイフや櫛や鋏を見つけ、
物欲しそうな眼で指ぬきを見つめるか。

また祭日に立つ市には雑多な見世物がつきものである。

The Mountebank now treads the Stage, and sells
His Pills, his Balsams, and his Ague spells;
Now o'er and o'er the nimble Tumbler springs,
And on the Rope the ventrous Maiden swings;
Jack-Pudding in his parti-colour'd Jacket
Tosses the Glove, and jokes at ev'ry Packet.
Of *Raree-Shows* he sung, and *Punch's* Feats,
Of Pockets pick'd in Crowds, and various Cheats. (ll. 83-90)

いかさま薬売りが今や舞台を踏んで、種々の
丸薬や膏薬、悪寒封じの呪い札を売る。
今や敏捷な曲芸師が何度も何度も跳躍し、
ロープの上で向こう見ずな乙女が揺れる。

道化師がまだら色に染めた上着を着て、
杯を掲げ、あらゆる薬に冗談を飛ばす。
彼は覗き眼鏡やパンチの偉業について、
人混みのスリ、種々の詐術について歌った。

オックスフォード版の注釈によれば、いかさま薬売りは客を呼び寄せるために、綱渡りの娘や道化師に芸をさせたようである。(10) 当然のことながら、この市の場面はウェルギリウスの原典には該当する箇所がなく、また牧歌で歌われる主題としてもきわめて異例である。サムブルックは「土曜日」がウェルギリウスの第六牧歌を英国化したものだとは指摘した上で、この箇所についてゲイが写実的な筆致で活気あふれる市を鮮やかに共感をこめて描いているので、最終的な結果はバーレスクとは異なると主張する。(11) ただしゲイのこのような描写が、ロンドンを舞台にした『トリヴィア』や『乞食オペラ』につながっていくことは間違いない。

続いてボウジベウスは「チェヴィー・チェイス」や「森の子供たち」など英国の伝承バラッドについて歌う。アディソンは一七一年に『スペクテイター』第七十号および七十四号で前者を、また第八十五号で後者を取り上げ、いずれも英国の平民に広く知られたものと賞賛している。(12) この他にも「水曜日」の冒頭でゲイが「素晴らしい才能を持った詩人」(bard of wond'rous meed, l. 17)と呼んだトマス・ダーフィは、一七一九年から二十年にかけて六巻本のバラッド集『機知と歓楽、憂鬱を清め去る特效薬』を出版し、ゲイの仇敵フィリップスも一七二三年に三巻からなる『古バラッド集』を編纂している。(13) しかしボウジベウスの歌は、フィリップスやダーフィに対する直接的な風刺というよりも、ウェルギリウスの第六牧歌でシレヌスの歌った神話を、意図的に卑俗なバラッドに引き落としたパロディと言えるであろう。

結び

ゲイの『羊飼いの一週間』は、『ガーディアン』で自作の『牧歌集』を無視されたポーブを代弁する形で、ホイッグ派の文人たちが激賞したフィリップスの『牧歌集』に対する意趣返しという側面を持っている。フィリップスの牧歌は古典的な牧歌の枠組みを借りながらも、英国の古語やことわざ、英国の動植物や慣習などをちりばめた英国風牧歌である。ゲイはフィリップスを揶揄するために、これらの特徴を巧

みに織り込み、過大に強調することでバーレスク『羊飼いの一週間』を書き上げた。

ゲイの作品の最大の特徴である滑稽味は、このバーレスクの手法と切り離すことができない。ゲイはウェルギリウスの『牧歌』から一節を抜き出して自注に示しながら、それを英国の野卑な羊飼いの愚かな行動に変えてみせる。原典とのずれが読者の笑いを呼び起こすのである。古典牧歌の慣習をひねったものも少なくない。失恋した羊飼いが自死を選ぶという主題は、もう夜だからという理由であっさり覆される。まじないで浮気した男を呼び戻すという筋書きには、草の上での野合というおまけがつく。

またゲイは田園の労働や遊戯や慣習を詳細に描写しており、古典的な様式観がかなり残るフィリップスの牧歌に比べ、『羊飼いの一週間』でははるかに現実性が強まっていることも否定できない。ある意味でゲイは、アルカディアを舞台にしたポープの古典的な牧歌に終焉を宣告すると同時に、英国の田園生活を主題にしたフィリップスの路線を踏襲し、より先に推し進めたと言ええるのである。

注

- (1) *The Guardian*, ed. John Calhoun Stephens (Lexington: The University Press of Kentucky, 1982) 160-5. 牧歌論争については拙著「十八世紀初頭の英国における牧歌論」『駿河台大学論叢』第42号(2010)を参照。
- (2) *The Correspondence of Alexander Pope*, ed. George Sherburn, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1956) 1: 229.
- (3) John Gay, *Poetry and Prose*, eds. Vinton A. Dearing & Charles E. Beckwith, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1974) 1: 90-2. 注釈が有益である。2: 515-8.
- (4) John Robert Moore, "Gay's Burlesque of Sir Richard Blackmore's Poetry," *JEGP* 50 (1951) 83-9., William D. Elis, Jr., "Thomas D'urfey, the Pope-Philips Quarrel, and The Shepherd's Week," *PMLA* 74 (1959) 203-12.
- (5) John Gay, *Poetry and Prose*. 2: 523., *Samuel Johnson's Dictionary of the English Language*, ed. Alexander Chalmers (1843: London: Studio Editions, 1994)
- (6) John Gay, *Poetry and Prose*. 2: 522. なお「魚の目が疼くのは篠つく雨の降る予兆」という一節はスウィフトの「街の驟雨の情景」(A Description of a City Shower)からの借用である。拙著『田園の詩神～十八世紀英国の農耕詩を読む』

89-93頁を参照。

- (7) John Gay, *Poetry and Prose*. 2: 524.
- (8) Hot-Cockles とは目を閉じてうつ伏せになった者の背中を皆で叩き、誰が叩いたかを当てる遊戯。Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England* (1801; London: Methuen, 1903)
- (9) Patricia Meyer Spacks, *John Gay* (New York: Twayne, 1965) 37.
- (10) John Gay, *Poetry and Prose*. 2: 537. この注にしたがって glove は OED の3. Some kind of drinking vessel. と解する。
- (11) James Sambrook, *English Pastoral Poetry* (Boston: Twayne, 1983) 108-9.
- (12) Joseph Addison, *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1965) 1: 297-303, 315-22, 360-4.
- (13) Thomas D'Urfey, ed. *Wit and Mirth: or Pills to purge Melancholy*, 6 vols (London: J. Tonson, 1719-20), Ambrose Philips, ed. *A Collection of Old Ballads*, 3 vols (London: J. Roberts, 1723)

本研究は科研費(23520317)の助成を受けたものである。